



# レンズを通して

連載「六月」

写真・文 高田宮妃久子殿下

ツツドリ 33cm カッコウ科

東アジアを中心に分布し、日本には夏鳥として4月に渡来する。九州から北海道のほか対馬でも繁殖。森林に棲み、センダイムシクイやメボムシクイなどのムシクイ類に托卵。名は、「ポポ、ポポ」と竹の筒を鳴らすような声に由来。

# 托卵する鳥、 される鳥

写真文 高田宮妃久子



ホトトギス 28cm カッコウ科

日本には夏鳥として5月中頃に渡来し、九州から北海道南部で繁殖。国外では、ヒマラヤからウスリー地方、朝鮮半島で繁殖。カッコウに姿が似るが一回り小さく、体重は約半分の50グラムほど。森林に棲み、おもにウグイスに托卵。「キョッキョツ、キョッキョッキョ」とけたたましく鳴く。

「静かな湖畔の森のかげから もう起きちゃいかかとカッコウが啼く」という童謡を覚えていらつしやいますか。朝、身支度をする際に口ずさむと明るい気持ちになる曲で、この爽やかな季節にとても合います。カッコウは5月中頃に南アジアから渡ってくる夏告げ鳥です。日本に渡ってくるカッコウの仲間には4種類。そのうち、私が未だ撮っていないジュウイチを除く3種の写真をご覧に入れ、彼らに共通する「托卵」という興味深い繁殖習性をご紹介します。

托卵とは自分の巣を作らず、ほかの鳥の巣に卵をこっそり産み付けて、ヒナを育ててもらう習性のことです。托卵される鳥(宿主)であり、ヒナを育てる(仮親)にとっては迷惑な話としか言いようがありません。カッコウの仲間は、卵を産み始めた宿主の巣の卵1個を啜<sup>く</sup>えて外に出し、そこに自分の卵を産み落とします。この卵は宿主である仮親の卵より少し早く孵化します。そしてそのヒナはまだ目が開いておらず、羽根も生えていない体で、仮親の卵を背中に乗せて全部巢外に押し出して、巣を独占してしまうのです。ヒナは仮親が運んでくる今は亡き「仮兄弟」分の餌も独り占めしてすくすく育ち、仮親よりずっと大きな体になって巣立っていきます。

カッコウの仲間を擬人化すると、子育てをすべて他人に押しつける親であり、かわい顔をした賢い女性詐欺師といったところでしょうか。托卵によってカッコウは子育てから解放されるため、ほかの鳥より

多くの卵を産み、より多くの子孫を残す可能性を手に入れました。自分で子育てをしていた彼らの祖先が、どのようなきっかけで托卵を始めたのかはわかっていませんが、生物の進化が生み出したひとつの生き方であり、極めて特殊ですが、成功した子育ての仕方ともいえます。ただし、宿主も騙されっぱなしということではありません。長い間、くりかえし托卵されていると、カッコウの仲間が巣に近づくことを嫌い、攻撃します。また、宿主によっては卵を見分け、托卵された卵を捨てるようになります。そのため、カッコウの仲間はより巧妙な托卵のテクニックを進化させることで応戦してきました。

カッコウの仲間は、飛ぶ姿や胸と尾羽の縞模様、猛禽類に似ており、それによって托卵相手を威嚇して、巣を空けるように仕向け、素早く托卵することによって相手を見つからないようにしています。またカッコウ科の鳥たちの卵の色彩や模様は、それぞれ托卵する相手の卵によく似ている傾向があります。似た卵を産み、宿主に気づかれぬようにするためです。少しでも優れた能力を持った個体が子孫を残すことで、巧妙な托卵テクニックを進化させてきたのでしょう。ここには托卵する側と托卵される側の攻防戦と知恵比べがあり、実に興味深い関係性だと思えます。

托卵するカッコウの仲間は、あまりにも托卵に特化した結果、親子関係だけでなく、一緒に子育てをする夫婦関係、さらには他の個体との仲間関係をも放棄し、一生を孤独に生きる鳥になってしまいました。自分で子育てした方が確実に子孫を残せる状況でも、もう元には戻ることはいけません。そう考えると彼らの姿や鳴き声には、どこか哀愁が漂っているようにさえ感じられます。



## カツコウ 35cm カッコウ科

日本には夏鳥として5月初めに九州から北海道に渡ってくる。ヨーロッパからアジアにかけて繁殖。草原や牧草地といった開けた環境に棲み、オオヨシキリやモズ、オナガ、アオジ、ビンズイ、ハクセキレイ等に托卵する。「カツコウ、カツコウ」と鳴く。

